

社会福祉法人
ミッドナイトミッションのぞみ会

2008/12/1 No.49

発行者：社会福祉法人 ミッドナイトミッションのぞみ会

本 部：〒293-0023 千葉県富津市川名1436番地



イエス様を 慕う人

グドルンシエーア 宣教師

二〇〇八年のアドベントの季節を迎えました。ドイツではもう先月から町の風景が変わり、すっかりクリスマスを待つ気分になりました。

何かあるいは誰かを待ち望みますと心は憧れに満ち満ちています。そして待っている対象は近づけば近づくほど心はだんだんと広がっていきます。

アドベントの季節において私たちはイエス様のご誕生を待ち望んでいます。元々アドベントとは、ラテン語で「到来、到着、接近」という意味で、アドベントの方に、近くに、そしてベニオーレ来る、達するという合成語です。英語でアドベンチャー(冒険、異常な事件、危険な旅)ともラテン語の語源では関係あるみたい。

主イエス・キリストが人間になってこの世に來られたという異常な出来事を祝うクリスマスを前にして、四週間準備をしようということなのです。

日本では、「待降節」とも呼んでいます。この場合は、待つ側の気持ちが前面に出ている。

ます。しかしラテン語の方では、「来る」ということが重視されていて、人間の側がどんなことになってもイエス様が來られるのです。例えば、私たちが忙しくしていてもイエス様のことなんか忘れてしまっていて、イエス様、神様なんかいないと思っていて、来る。「今は都合悪い、ちょっと待って下さい」とは言えません。それは、具合の悪いことでもありますが、有り難いことでもありまして、神さまは私たちがいいではなく、決定権は神さまの側にあるということです。

ドイツの教会では、四本立ての燭台か、アドベント・クラッツが出され、四本のローソクに一週間ごとに一本ずつ火がともされます。つまりアドベント第一週には一本、第二週には二本、第三週には三本となってクリスマス礼拝(たいがい四週目の日曜日)に四本となります。

教会によっては、古代からの習慣に従って四本のローソクは紫色。それは悔い改めの気持ちであらわし、ローソクが一本ずつ増えてゆく度に一つずつ自分の罪を悔い改めるのです。この間の説教台や聖書台の布も紫色です。昔から人々は、そういう小さな一つ一つのことに注意を払いながらキリストが來られるということを生活の中心にすえようとしたのです。

教会や牧師によっては、そういうことに凝るのはプロテスタント的ではないとお考えに

なる場合もありますので、必ずそうするものだとお考えにならないでください。色々な祝いかたがあったいいのですし、違いの多さこそキリスト教の豊かさなのですから。

一番大切なことは、二〇〇八年前の出来事を祝うだけではなく、現在の私たちのところに来てくださるキリストを私たちが自分の主として迎えることなのです。

旧約聖書にはこういう御言葉があります。「神に従う人は待ち望んで喜びを得る」(箴言十の二八)。この場合の「従う」は「慕う」とも訳すこともできます。

望みの門の各施設の皆さんは今年のアドベント季節においてイエス様を思慕することによっていっぱい喜びに満たされますよう心よりお祈り申し上げます。(在ドイツ)

望みの門 かずさの里 日独子ども・家庭アカデミー②

(略称ピーターパンの会)

常務理事 井本 義孝



「時は春、日は朝、朝は七時、片岡に露みちて、揚雲雀ののりいで、蝸牛枝に這ひ、神そらに知らしめす。すべて世は事もなし。」
ピーターパン罷り通るの題で中学時代の国語に載っていた気がする。作者は英国のキッ

プリングではなかったか？ピーターパンは子どもの幸せの象徴。この日独子ども家庭アカデミーも又、子どもの幸せづくりを目指す純粹無垢の民間団体として、さる七月十九日に望みの門かずさの里のレストラン「カナ」(養護施設の食堂)で設立総会が行われた。

趣意書には……中略……私たちは、この家庭から離れて生活している環境をただ(一)負の環境と考えず、逆にこの幼児から青年前期に至る子ども達に最高の教育を施し、専門性を発揮して、現代が失いつつある豊かな感性をもつ子どもの育成を目指し、教育共同体とでもいふべき環境を世にあらしめねばならない。……後略……とあります。

会則には1. 里の支援を行う。2. 教育基金の造成。3. ドイツとの福祉青年の交流。4. セミナーの開催・研究協議会。5. その他児童福祉に貢献する事業。と簡潔に明記されている。古来、子どもは宝として慈しみ、育まれてきた。それが第二次世界大戦に於いて、未成年の十五、六才の少年が少年兵として、第一線に送り出され、或いは戦災のため親兄弟を失い戦災孤児として非情な生活を余儀なくされたことはついこの前のことである。戦後はるかに六十余年を経過し、少子社会の到来が人々に喧伝されても、児童の育成については世間の関心が薄いのが実情である。その証拠に、全国に約五七〇ヶ所の児童養護施設があり、約四万人の子どもたち(里親委託数

も含む)が生活しているが、これは六十年前の数とほぼ同数である。又、施設で働く職員の配置基準もこの三十有余年変化なく、きびしい職員数で対応している有様である。このような状況であるため、折角児童福祉を志し、有為の青年が就職しても、現実の重さに負け離職することとなりいわゆる現場育ちの専門職が育ちにくい現状がある。従って、施設で生活する児童も天賦の才能を十分に発揮できず埋もれてしまうことになり易い。もちろん本人の努力が先行すべきであり、家庭で育つ子どもが全て優れた社会人になるわけではない。しかし子どもは社会の宝であり、次代を背負うものである以上、大人は多大の関心を児童に向けねばならないのは至極当たり前のことのように思えるのである。

「ピーターパンの会」はその意味で児童福祉に関心を寄せて頂くためのソーシャルアクションである。今は会員八十名余の小さな団体であるがこれから大きく育っていく。單に「里」のための支援でなく、千葉県のために、日本のために、世界のために貢献する団体、組織になるために「日独子ども家庭アカデミー」と命名されているのである。

幸いに本法人はいつも時代のニーズを先取りし、祈りと奉仕により先駆的事业をなしてきた。今、ここに「ピーターパンの会」を生み出し、社会的に育成するためには、人と金組織になれば健全な発展は期待出来難

い。組織の発展は自主活動あつてのことである。従って、表面的にも、実際的にも法人と一線を画したい。そうすることにより、多大の関心を社会に喚起せしめ、ソーシャルアクションとして、停滞せる児童福祉業界に一石を投じることができよう。現在の会員の方々は殆ど福祉に関係のない異業種のご出身である。このことが大切である。職種は会社員、公務員、自営業、教員等々であり管理職経験の方や現職の方もおられる。忘れてはならぬのは、福祉施設は税で賄われていること。「ピーターパンの会」は率先して地域での有力なお働きをなさっている方が多い。地域の支援あつての福祉であろう。心から「ピーターパンの会」の発展を願うものである。

「望みの門双葉乳児園建設決定」

去る十一月四日、第一四二回理事会が日本キリスト教団西千葉教会会議室にて開催され、第三号議案の乳児院開設に係る件として上程、慎重審議の結果全員賛成にて決定された。経過としては、三年前に開設された「望みの門かずさの里」の遊休施設の旧墨田区健康学園「さざなみ荘」を改修、乳児園を開設してはとの提案が関係者からあり、県当局の強い要請に伴い半年程前から検討されていたものです。当初は有料老人ホームのモデルハウスとしての提案もあったが、社会ニーズの強

い乳児園の建設に至ったものです。

◎施設概要は次のとおりです。

名称	望みの門双葉乳児園建設工事
場所	千葉県富津市湊705番地
敷地	九二〇㎡
延床面積	約三八〇平方メートル
構造	木造二階建
定員	九名
工事概要	既存木造二階建及び別棟を改修一部増築
工期	二〇〇八年十一月下旬～ 二〇〇九年三月二十日
工費	六〇〇〇万円

望みの門 かずさの里 感謝祭を終えて

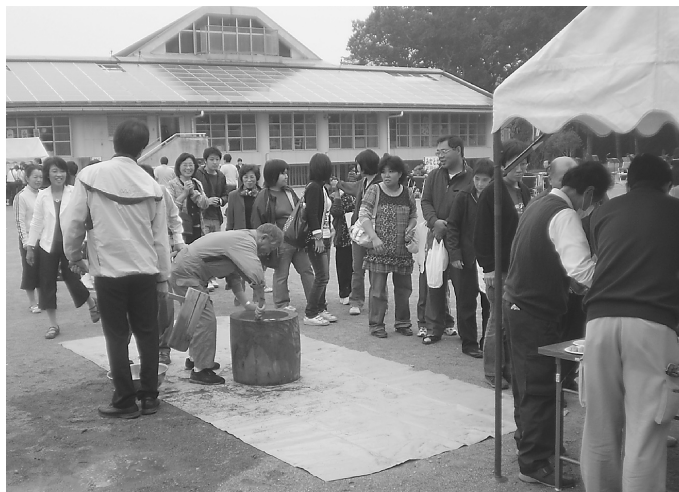
望みの門かずさの里施設長 戸波 宏幸
地域への仲間入りをし、二回目の「感謝祭」を昨年同様十一月三日に開催しました。関係者をはじめ地域の多くの方々に足を運んでいただき、模擬店等売り切れが続出するなど、盛会の内に終えることができました。改めて感謝申し上げます。

この感謝祭は日頃ご支援いただいている関係者・地域の方々への感謝であり、神の恵みへの感謝でもあります。地域で関わりの深い

幼稚園・学校等との連携をもとに、今年のみなど幼稚園児の鼓笛隊、天羽中学校の吹奏楽部、天羽高等学校の合唱部の皆さんにご参加いただきました。かずさの里エコステージ(森林を背にした屋外ステージ)に様々なハーモニートメロディーが流れ、はやり言葉ですが感謝祭特別コラボレーションといったところでした。今後もご協力いただきながらより楽しいものにしたいと思います。

バザー会場等を廻る中、地域のお祭りで世話いただいた区長さん、青壮年の方、また近隣の方々のお顔を拝見し、子どもたち共々この地に腰を降ろせたかなと安堵いたしました。少子





化の波を受け地域の子供会等の活動はモチベーションを高めるのに苦労すると聞きます。そんな中、「子どもの元気な姿は何よりも地域を明るくするよ……」こんな言葉に勇気づけられ、二年に一度の地域の祭り（十月十二日）にかずさの里丸ごと参加しました。そしてかずさの里感謝祭に多くの方々を迎えることができ、地元での暮らしを肌で感じましたということです。

さて感謝祭を終え一年を締めくくる季節となりましたが、一年間の子育てへの様々な思

いが交錯しています。まとまらない考えにある中学校校歌の一節が浮かびました。「敬あり信あり愛あるところ」……子どもが互いに敬い、大人を敬い、共に信頼し合い、愛し愛される。このために子どもも大人もどう努力するか、具体的にどう取り組むのか、改めて考えてみようと思います。

一方周囲に眼を向けますと、児童相談所への一時保護児童は増え続け、児童養護施設には定員を超えての入所依頼がある状況となっています。この状況下ではやむを得ないと理解するものの、国の施策・行政全般の取り組みを考えると、納得のいかない気持が強くなります。小舎制等への移行が叫ばれるなか、生活空間の圧迫を承知しながら大舎施設への定員外入所の要請など、理想は求めるが現実回避なら矛盾しても……の姿勢に映ります。

現場の状況を冷静に考えるならば、既存する施設の力量に依存する次元では無いように考えます。児童福祉、障がい福祉ともに、脱施設化が公の指針ともいえます。現実を見直し、今一度中央での論議が必要と考えます。児童福祉法の一部改正がまもなく成立するかと思います。現状打開に向けた根本的な改革が行政全体で取り組まれることを切に願います。

あれもこれもと不満も多いなか、改めてこの一年の恵みに感謝しつつ、迎える年に向け新たな決意をしようと思います。

第三十九回

地域交流スポーツ大会

望みの門新生舎 副施設長 森 和浩

去る十月十一日の土曜日に第三十九回望みの門地域交流スポーツ大会が実施されました。新生舎は担当施設でもあり、準備作業の段階から大忙し。期日が近づき週間天気予報が日に日に変化するたびに関係者はヒヤヒヤしていました。

テント設営を前々日に終え当日を迎えましたが天候は小雨。午後には回復するという予報に期待して大会決行に踏み切りました。

朝八時には各施設の実行委員が会場に集まり手際よく





準備作業が完了し、あとは開会式を待つばかり。景気つけの餅つきがかずさの里の子どもたちの飛び入りで大賑わいとなるなかで開会式を迎えました。

小雨の中の開会式は競技参加者の気持ちを曇らせてしまいましたが、一番最初のプログラムをかずさの里の子どもたちの競技として行い、子どもたちの活躍に会場は湧き上がりま

す。やはり躍動感のある子どもたちの姿は周囲に力を与えてくれるようです。

その後の玉入れや大玉転がしなど各施設別の競技にも熱が入り、会場全体も小雨を忘れ

るような勢いがあったように感じます。

競技もスムーズに運び昼食と休憩に時間を多く取り、模擬店や餅つき・新生舎利用者による「よさこいソーラン節」を昼休みのアトラクションとして実施し、多くの来賓の方にも楽しんでいただけたようです。なかでも餅つきはお弁当を食べたばかりのはずの子どもたちに大人気。「ボクにもやらせてー」「順番だよ、順番。」などと大騒ぎ。つきあがったその場から「食べたーい。」と頬張っている姿がありました。

午後のプログラムは思考をこらした各施設別競技と、車いすや老人の方でも参加できるパン食い競争・ボール回しなどの競技を行い、会場の皆さん全員が参加して楽しむことができました。

最後の競技は職員デカパンリレー。大きなパンツを二人ではいて走る競技ですが、なぜか頭に着ぐるみをつけて走り出す施設長も現れ会場は大いに盛り上がりました。

最終得点は、僅差で紅組が勝利することとなりましたが、勝負は時の運。小雨交じりの秋空の下それぞれの競技への熱い声援は互角であったように感じます。

このようにして第三十九回望みの門地域交流スポーツ大会が盛大に執り行われました。天候によって地域の方々の参加が少なかつたのは残念ですが、ご厚志を寄せてくださる方々や「子どもたちに飲ませてよ」とジュー

ス一箱を届けてくださる方もありました。正に地域の方からも身近な行事として受け入れられていることを実感することができ、来年度、第四十回の開催に向け大切にしたいと考えています。

最後に、地域をはじめ富津市社会福祉協議会など、多くの関係者の皆様のご協力に改めて感謝申し上げます。

婦人保護施設

望みの門学園

学園の楽しみ



主任栄養士 鶴岡はるみ



「チャリンチャリンチャリン」学園はつるし鐘のチャイムで色々な時を知らせ、利用者はその音を聞いて動いています。一日の始まりのチャイムは朝ごはんの前に担当利用者によって鳴らされます。その他、昼ごはん、夕ごはんはもろろんのことおやつの時間や朝の会の前、休み時間の終わりを知らせる大事なものです。

学園は現在二十三名の利用者が毎日生活しています。学園内の厨房で働く者、工房とファームで作業する者やのぞみ会の他施設へ外勤に行く者、企業等へ外勤に行く者様々で

すが、皆で参加する行事もたくさんありました。九月には千葉で音楽祭があり、手話での賛美歌を披露して大好評でした。このために毎日毎日昼ごはん後に練習した甲斐がありました。十月には気功大会、十月後半から十一月にかけてグループに分かれ白浜の南国ホテルや奥只見、北海道へと旅行にも行ってきました。皆それぞれに、毎日の生活では体験できないことや、なかなか食べられない食事を楽しんでできたことでしょう。学園に帰ってきたからの利用者の輝いた顔や止まらない土産話が物語ります。最近では銀杏拾いに近くのイチヨウの木まで行ったり、施設周辺の蔓でリースを編んだりと季節と共に生活する楽しさを実感しています。献品でいただいたさつまいもを食べるのも楽しみにしていますし、毎日の食事もたいへん楽しみにしていて、献立作成している私の励みとなりプレッシャーにもなっています。

私自身産休が明け楽生園から学園へと異動となり、何もかもがガラッと変わり戸惑う毎日ではありますが、利用者と共に成長し、小さな喜びでも嬉しく思い、他人に感謝することを忘れず気負わない毎日が過ごせたらと思います。



特別養護老人ホーム

望みの門紫苑荘

『笑顔』のお手伝い



副施設長 白鳥 尋子

七月に着工となった増築工事も着々と原型ができて始めてきました。利用者の皆様にもご迷惑をおかけしている中、板張りされた窓の隙間から工事の進み具合を見るのが毎日の日課となっている利用者様もいらっしゃいます。そのような最中、九月十六日に佐久間市長が来荘され、長寿のお祝いの式典を行いました。今年百歳の方一名と米寿の方五名が赤いちゃんちゃんこに赤い帽子を身につけ、他の利用者様に囲まれ緊張の趣で市長より賞状とお祝いのお言葉を頂戴しました。中には感無量の利用者様も……。

現在の平均年齢は八十四・七二歳。六十五歳から百歳までの利用者様が、お元気に生活されて居ります。そしてまた来年も、百歳を迎えられる方がお一人。今年同様皆さんでお祝いするためにも「お元気で一年をお過ごし下さい。」という言葉で会が締められました。九月の行事は厳粛に、十月は元氣いっぱい！秋のもう一つの行事といえればやっぱり遠足。あまり遠くには行けません、二階の利用者さんが中心となり、昼食外出を行いま

した。

少人数で3日間それぞれ行き先は違いましたが、帰荘した際の利用者様の満足、且つ、素敵な笑顔がどのグループからも見受けられ、その笑顔を見ているとこちらまで嬉しく、自然に笑みが……。逆に元気を頂きました。また、体調により参加できない方々は、どら焼きや、クレープ等、おやつ作りをして楽しみました。出来栄はもちろんGood！自分で作ったおやつは格別だったようです。

これからも、『また行きたい！』『またやりたい！』『今度は〜！』……等々、できるだけ利用者様の声にお応えしていきたいです。そして笑顔をたくさん見せて頂きたいです。



養護老人ホーム

望みの門 楽生園

個別支援を目指して



主任支援員 小嶋 友子

四月から中村前園長の退任に伴い井本園長が八年ぶりに再度常務理事兼任のまま着任されました。また田尻主幹が総合施設長補佐として園長室で執務されると共に、事務室にも渡邊由佳相談員が新たに加わり白鳥副施設長、中島主任の三人体制となりました。

現在楽生園では、利用者のニーズを聞き、施設でその人らしく、快適な生活ができるように、ケアプランを作成しています。

一人の職員が、六、七名の利用者を受け持っています。

その方達に日頃困っていることや、やりたいことなどを個々に聞き取り調査します。そして解決すべき課題について各職種が集まり、六ヶ月に一回のペースで話し合いをしています。しか



し、利用者の状態（入院等して以前の生活が困難な場合）に変化が見られた時には、短い間隔で行う時もあります。

今までは、職員だけで話し合いをしていましたが、最近は、参加できる利用者については、一緒に出席して頂くようにしています。そうすることで、担当者が聞いたこと以外のことでも本人から直接聞けるので、解決すべき課題の内容が明確になり、納得して了解を得ることができました。ADLの低下や、精神疾患等持っている方など様々な利用者がいらっしゃるので全員が話し合いに参加するのは難しいと思いますが、可能な限り参加して頂き、いつまでもその人らしい生活ができるよう支援できたらと思っています。

これから、家族がいらっしゃる方については、可能であれば、話し合いに参加して頂けたらと考えています。利用者がいつまでも自立した生活が送れるよう、又、介護が必要であっても楽しく生活できるよう支援して行きたいと思っています。

知的障害者通所授産施設

望みの門 新生舎

のぞみ米 初収穫なる



施設長 三橋 信康

思い起こせば三年前、新生舎は地元川名地

区の休耕田約八千五百平方メートルを借り休耕田の復旧化に向けて取り組みを始めた。十



年以上に渡り農地は一面背丈を遙かに超える葎や雑木で覆われた荒地。ゴミや廃棄物なども多く草刈りと耕耘を繰り返す毎日、復旧まで三年を費やしました。ようやく圃場の整備が整い、今年から本格的に米作りに着手しました。五月晴れのなか、法人理事、各施設長の臨席を賜り、井本常務理事の司式のもと厳粛な「田植え式」を行い、無事に米作りの第一歩を踏み出すことができました。田植えから百二十五日。この間、朝・夕の田圃の見回りは欠かすことができず、休日の水管理や草刈りなど八十八の時間をかけてようやく迎えた収穫です。担当者にとっては日々大変だったことと思います。

九月六日ついに収穫の時、豊年感謝祭を迎えました。

当日は、曇りの予報がすっきりと晴れ渡る

秋晴れ。稲刈りには暑すぎるくらい陽気となり、大勢の来賓とかずさの里の子どもたち、エコクラブの利用者も顔を揃え、全員で感謝の祈りを捧げた後、記念すべき初穂の刈り取りを行いました。葎や雑木が生い茂る荒地を開拓しようやく迎えた収穫です。歩んできた道のりを振り返ると熱いものがこみ上げてきます。続いて参加者全員での稲刈り。エコクラブの利用者も鎌を持ち、自分の育てた稲を刈り取りました。来賓の方々からも「良くここまでやったねー。」という賛辞の言葉を頂きエコクラブの利用者も鼻高々でした。刈り取った稲をおだ掛けにしたら、さあ昼食。全員でバーベキューを囲み賑やかな祝宴となりました。田圃で食べるおにぎりはやっぱりおいしいですね。来年が「のぞみ米」のおにぎりとなれば、きっととってもおいしく格別な味がすることでしょう。このようにして法人として初めて取り組んだ稲作の豊年感謝祭が執り行われました。



そして地域の方々が新生舎の稲作事業に注目し、この実りに対して大きな拍手を頂くこととなりました。職員が努力した分、利用者にも大きな感動を与える結果となったのが最大の収穫であったと思います。新生舎の皆さん、お疲れ様でした。

この稲作事業は今後も継続して取り組み予定です。これまでの皆さんの応援と力強いバックアップに厚くお礼申し上げますと共に、この新生舎の小さな取り組みがやがて大きな輪となり地域の活性化や環境改善へと繋がることを期待します。

尚、後日、コンバインによる刈り取りを行い、今年の収穫量は、富津産米ひとめぼれ三、五トンであったことをご報告いたします。

一体型共同生活介護事業所
グレースホーム

「健康な生活」のために

主任世話人 藤崎 美智

グレースホームは、四つの共同生活住居に現在十九名の方々が生活しています。利用者の年齢は、男性が四十五歳から六十七歳（平均年齢五十八・六歳）、女性が三十歳から六十八歳（平均年齢五十三・五歳）と幅広く、全体の平均年齢は五十四・八歳となっています。平均年齢からすればまだまだという感じは

しますが、私自身がグループホームを担当し二年八か月の間に利用者の健康状態は少しずつ変化しているようです。年を重ねた分、足腰の弱さが目立ち始めたり、季節の変化に順応できず風邪をひいたり、時には物忘れも多くなるなど着実に「老化」が進んでいるように思います。

健康で豊かな地域生活を提供するには、先ず健康が基本です。日頃の様子観察はもちろんのこと、体調の変化が現れた場合には担当看護員に相談しながら、通院などの迅速な対応を図っています。また、老化に加えて内科的な疾患を持つ利用者も十六名おり、疾患は糖尿病・高脂血症・喘息……と多岐に亘っています。このような利用者には、定期的な通院を行うことで、大きな病気へと移行しないように対応しています。なかでも忘れてならないのは、精神的な疾患を持つ利用者が十二名いることです。四週間毎の精神科の定期通院は欠かすことができません。精神科の通院日には、新生舎の職員の力を借りてマイクロバスを仕立てての通院となります。さらに症状の重い利用者には、臨時の受診・通院を図るなど心身ともに安定した生活が送れるように支援にあたっています。このような対応をしても、あちらこちらが痛い・痒いなどの訴えも多いため、その都度眼科・皮膚科・耳鼻科・歯科の通院と奔走する毎日が続いています。また、「メタボリックシンドローム」が最

近世論を賑わせていますが、健康であれば次は食事です。健康診断の結果を基に受診するだけではなく、内容や摂取量などにも気を付けた食事の提供も大切なことです。でも、みんなカロリーの高いものが好きなんだよね（特に肉や揚げ物……）そこは、世話人の腕の見せどころ！ 季節の食材を活かしながらヘルシーな食事となるよう、日々奮闘中です。健康な生活を維持していくのは、日々の細やかな支援の積み重ねが、大きく影響していきます。行事を行うことで、マンネリ化しがちな生活に楽しみを持てるようにしています。さあ！ いよいよクリスマス会・忘年会・正月の一泊旅行とみんなが楽しみにしている行事が待っています。これからも利用者個々の体調の変化に留意しながら、ともに楽しく生活していきたいと思っています。

地域活動支援センター

望みの門 ヨカデイスサービスセンター

活動状況

介護員 倉本 幸一

ヨカデイスサービスセンターは地域活動支援センターとして活動をしています。

利用者さんの楽しみの活動のひとつとして小さな畑を耕し、種を蒔き、苗を植え、草取り、水まきをして、いろいろな野菜を育てま

す。今年、一番多く採れた野菜はナス、次にミニトマト、ジャガイモ、さつま芋、絹さや、落花生でした。採れた野菜は調理実習で美味しく食べました。落花生は味見程度しかありませんでした。芋づるは煮て白いご飯にのせて食べ、さつま芋は焼いて食べました。「おいしい」と皆さんの笑顔が出て「これからいろいろな野菜や花を植えよう」と話しています。

活動の一つに月二回の調理実習があります。実習の前日に、皆で買い物に行き、自分達であれこれ食材を選びます。自分で選んだ物で調理をすると、なおおいしく感じます。

「又、買い物に行きたいね」と次が楽しみです。

もう一

つの活動

は、月二

回地域の

クリーン

活動とし

て近隣の

あき街な

どのゴミ



すぐゴミ袋が一杯になる位ドライバーのマナーが良くありません。「ポイ捨て」が多いのには、がっかりしますが、美化のために活動しています。

これから、寒い季節となりましので、利用者さんの健康に充分気をつけながら、どうしたら楽しく活動できるかを考えていきます。

通所介護

望みの門 デイスサービスセンター

地域に根ざした

在宅サービスを目指して



施設長 室屋 三男

在宅三部門では、より質の高いサービスの提供はもちろんのこと、更なる利用者増を目指している。

これまで、三度にわたる経営戦略会議を開催し、職員一人一人が在宅サービス部門としての目的を成就するため、具体的に実行し行動して来た。

私達は、日常的にも、利用者ニーズに必要という言葉を良く使うが、本当に利用者の必要としている事を、的確に把握しているのかは、はなはだ心もとない。自立支援と言う言葉もしかり、利用者増を図る事の絶対要件としては、質の高いサービスの提供に裏打ち

され、当たり前のことだが「利用者を選ばれる事業者になること」であり「他事業者との競争優位性を確立すること」に他ならない。

しかしながら、どこにどんなサービスを必要としている方がどれだけののか、といった基本的な情報収集が不足していたことは否めない。これまでは、高齢者に限らず、地域に暮らしている一般の方々の声に耳を傾ける事がいかに大事であるかとの認識が不足していたことも否めない。更に、そういった情報を入手するためのこちらからの能動的な働きかけが不十分であったとも否めない。

そこで、三部門では行動計画を立て、様々な活動を行った。第一には、各老人会との関わりや民生委員とのより積極的な関わりを持ったことである。これにより、サービスを必要としている方の情報を紹介していただくことも可能となり、幅広い人脈も得られたことである。又、商店や老人会へのポスターの掲示や、関係機関及び民生委員への情報誌の送付など広報活動を拡大すると共に、様々な行事への各団体・個人・ボランティアの参加を呼びかけるなど、草の根的な視点で地域との関わりを持つ努力を行ってきた。これらの活動を通してわかった事は、悲しいかな、まだまだ、地域の方にとって、在宅三部門へのなじみが少ないという事実であった。地域の方に、好意の目を持って、在宅サービス部門をどうしたら認知していただけるかが大きな

課題である。

地域と、より密接に、良好な関係を持つ事は最も重要であり、地域に根ざし、地域から信頼される、有益な社会資源として認められることが不可欠である。望みの門全体としても、今春のゴミゼロ運動への参加など、地域に貢献する動きが見られたが、地域の活性化の視点からも、福祉施設の役割は大きい。

他方、地域社会との関係強化のみならず、内部においても、人的環境の充実、物理的環境の充実はもちろん、利用者の方々に気持ちよくサービスを利用していただけるように、日常業務についても日々検証し、職員全体の技術、知識を向上させ、高い水準のサービスを維持することに努めることが肝要である。内と外にベクトルを向けた活動を在宅三部門が互いに協力して行い、地域に根ざした、信頼される居宅サービスの発信源となりたい。

児童養護施設

望みの門 かずさの里

三年目に向けて

副主任児童指導員 橋本 順子

「望みの門かずさの里は、平成十八年十二月一日に社会福祉法人ミッドナイトミッションのぞみ会が四十四年の蓄積された福祉力を傾注し、時代が必要としている家庭支援事業

に着手した施設です。家庭機能の弱体化は社会の責任でもあり、次代を担う子供達を、家庭崩壊による育児放棄や虐待から救い、安定した生活を保障しなければなりません。子供達の思いを受け入れ、安らかな暮らし・将来への願いを叶えるべく、法人の微力を顧みず、人と地域と神の力を信じて乗り出しました。」初心を忘れない為に、あえて、かずさの里の玄関に置いてあるパンフレットから、引用させてもらいました。

二名の幼児からスタートし、一年後には、三十名となり、今年十二月には三年目を迎えます。やんちゃな幼児さん八名は幼稚園生活を楽しんでおり、小中高生二十二名も、運動会、修学旅行、文化祭等の行事を終え、皆、遅しく成長し、前向きです。

中三生二人は高校受験に向けて勉強開始。女子高生二人は自立の為、不安はあるもののエデンへの引越しも終了しています。

先日、高一のT君が野球部の練習試合中に鎖骨骨折してしまい、入院し、手術をして、三日目に「里のご飯が食べたい。」と、ずっと付き添っていた主任にもらしたそうです。

退院し、今度は私達にも『お帰りなさい。』と言ってくれる人がいて嬉しい。三度のおいしいご飯が食べられて嬉しい。布団もお風呂もあったかい部屋も用意されていてボクは倅せだよ。」と白い歯を見せながら言ってくれました。涙が溢れました。

「重荷を負って苦勞している人は私の元に
来なさい。休ませてあげよう。」聖書の御言葉
がまさにT君に成就しているのです。不平不
満を抱えている子供達、私達がこのT君の様
に感謝できる人になれるよう頑張ります。

児童自立援助ホーム

東京望みの門 マナの家

後援会のお支えについて

生活指導員 法元 晴子

早いもので今年も残り少なくなりました
が、東京望みの門の今年度のバザープログ
ラムも終わりました。

東京望みの門後援会の皆様もほっと一息つ
いていらっしゃると思います。

私共の働きを支えて下さる後援会は、近隣
教会の婦人を中心に運営されておりですが、
毎月二回、十四〜十五名の姉妹方がお仕事会
に集って下さいます。

第二月曜日午後の例会では、その月の担
当教会の司会による礼拝で、姉妹方の証や講
師をお招きしての講演会などが計画され、実
り豊かなひと時が持たれます。十年あるいは
二十年以上と長年ご奉仕を続けて来られた信
仰の先輩の証は、日々マナの家の寮生との生
活に一喜一憂している私共職員にとっても、

良き学び、恵みとなっています。礼拝後の報
告では、寮長からマナの家の少女たちの生活
の様子話が話されますが、それぞれの入寮に至
る困難な状況や今抱えている問題に心を痛め
て下さり、ひとりひとりのことを覚えて祈り
を通して支えていただき感謝しております。

お仕事会では、一年がかりでバザーに備え
て、たくさんの手作り品が作られます。寮の
食堂いっぱい材料を広げ、皆様のアイデア
やセンスを駆使しての作品が、秋の各教会の
バザー開催までに完成します。エプロン、刺
繍入りの布巾、クリスマスリースや飾り、お
人形など、どれも一針一針に心のこもった素
敵な作品の数々です。各教会バザーでは、毎
年定番の商品を楽しみにして下さるお客様も
おられたりして、販売のお手伝いに立つ私共
も嬉しく思います。今年もたくさんさんのバザ
ー収益を、東京望みの門・マナの家の働きのた
めに捧げていただきましたが、この場をお借
りして心よりお礼を申し上げます。

なぜか雨降りの多い月曜日ですが、毎回お
弁当持参で十時〜十五時頃まで、熱心に和や
かにご奉仕下さる後援会の姉妹方の地道なお
働きに感謝の思いでいっぱいです。

寮生と後援会の皆様方との直接の交流はあ
りませんが、自分たちの知らないところで自
分のために祈られ支えられていることが、傷
ついた少女たちにきっと希望や励ましを与え
てくれると信じております。

中核地域生活支援センター

君津ふくしネット

「地域」で支える福祉とは

センター長 佐野 毅

堂本千葉県知事は、本年九月の県議会本会
議において民主党議員の質問に対して、『中
核地域生活支援センター』は、県民参加に
よる県の新しい地域福祉計画づくりの過程の
中から生まれた、新しい時代における千葉県
独自の福祉の相談センターである。二〇〇四
年十月にスタートして以来、県内十三か所の
中核地域生活支援センターで対応した相談支
援件数は、いまや年間八万件を超えるまでに
なった。県としては、今後とも『誰もが、あ
りのままに・その人らしく、地域で暮らすこ
とが出来る』地域社会の実現をめざした政策
に力を注いでいきたい。」と力強く発言され
ています。

「中核地域生活支援センター」が発足した
のとはほぼ同時期に策定された、県の主な福祉
計画（障害者計画、高齢者福祉計画、次世代
育成計画など）は、今年が改正の時期となっ
ています。

千葉県では「健康福祉千葉方式」に基づき、
「全くの白紙状態から、県民と行政とが協働
して」県の新しい計画づくりを進めることと
しています。

「君津ふくしネット」では、こうした県の計画づくりを進めるための手法である「タウンミーティング」の開催にあたり、県庁はもとより地元市役所（木更津市、君津市、富津市、袖ヶ浦市）と連携を図りながら実施しました。

また、十一月には、民間の福祉NPOの若い世代のスタッフを中心とした「福祉のイベント」も手がけました。このイベントでは、対象者やテーマを限定することなく「子ども」「高齢者・介護」「障害福祉」「医療」など、それぞれの分野において第一線で活躍されている方々を講師としてお招きし、「地域」で「分け合うこと」をテーマとしたセミナーを開催しました。

こうしたイベントや、県の計画づくりのための「タウンミーティング」も踏まえて、今年一年間の活動を振り返ってみますと、「地域で支える」とは、どういうことなのか、ということが私たちに課せられた大きなテーマであったように思います。

「家庭的基盤を失った子どもは、一時的に『児童養護施設』で保護される。」「家庭で家族で介護が困難になったお年寄りは、『特別養護老人ホーム』で介護を受ける。」「家庭で（家族で）支援が困難になった障害のある方は、『障害者自立支援施設事業所』で支援を受ける。」ことはもちろん必要不可欠な支援であります。

しかし究極の支援とは、「地域の中で」必要な支援や介護が、必要なときにいつでも安心して受けられることにあるのではないのでしょうか。

これからは、福祉の仕事は、福祉の専門家だけが担うのではなく、地域全体で「お互いがお互いを支えるしくみづくり」を醸成していく必要があります。

中核地域生活支援センター君津ふくしネットは、来るべき新しい年においても、引き続き「地域で支える」ことを念頭においてご奉仕させていただく所存です。クリスマスおめでとうございます。

編集後記



遥かにドイツのバド・ザルツウフレンより敬愛するG・シェアー師の玉稿を頂き心から感謝。原稿とお写真をインターネットで頂いた。その鮮明さに驚いたのは筆者の無智の故か。

さて世の中はやはり少しおかしくなっているのか、偽装、汚染米、レットルの張替、食品から犯罪まで父殺し、母殺し、また子ども虐待とか、これでもかと続々と続く。その中において十字の旗揚げた私たちの法人のぞ

み会は整々粛々と進む。

九月の稲刈り、かずさの里の子どもたちが手に鎌を持って体験したとのこと、新生舎の職員、利用者一丸となって見事再生した田園での収穫、三橋舎長の喜びの報告は、秋晴れに富士山を見るように清々しい。

三年目となった「里」のレポート、橋本保育士の怪我をしたK君へのタッチとその応答に福祉で働く職員の哀歓を感じたのは私一人ではなからう。いつも家庭とは家族とはと問いつけねばならない。「ピーターパンの会」は本法人の施設のみでなく、今日の日本の社会が土壌にはまってしまったような、教育界も、社会のいたるところで見られる無力感、閉塞感を打破し、本当の福祉社会を現出なさしめるソーシャルアクションとしてのスタートなのである。読者諸賢のご叱正、ご鞭撻を乞う次第。閑話休題。誌面にはなかったが地域活動支援センターである「ヨカデイセンター」で活動している姉妹の作品が、「南アフリカと日本の天使たち」と称した木更津市の展示即売会で大変好評を博したとのこと。作品はアートとしての扱いで、製作者はアーティストとして捉えるセンスに脱帽した。紫苑荘の工事は着々と進み、十八日には全てのコンクリートの打設を完了。いよいよ内装に入る。又、間もなく乳児院の建設が始まる。子どもの幸せづくりの一助になることを願う。

(Y・I)